The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞島津忠夫著『平家物語試論』
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 1999, 72, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68948
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

島津忠夫著『平家物語試論』

中本　大

平成九年三月、武庫川女子大学を退休された島津忠夫先生は、続けざまに著書を上梓された。準備周到のお人柄、当然のこととはいえ、その幅広い業績を改めて振り返ることのできたのは、誠に幸甚であった。平成九年七月刊行の『平家物語試論』も、その中の一書である。

およそ中世文学研究者で、軍記、就中『平家物語』に興味を抱かないものは皆無であろう。それほどに我々を誘慕する『平家物語』であれば、毎年数多くの論文が世に問われ、優れた研究業績が蓄積されてきたのである。その中で、島津氏は佐賀大学在任中、旧小城鍋島家の蔵書である、小城本『平家物語』十一冊との邂逅を直接の契機として、以来『平家物語』を考究されてきたのであった。

今日の軍記研究の趨勢は、島津氏も指摘されるように、「原本」を想定し、「いわばその一つの本文の幻を探り出そうとする試み」（本書七十頁）から離れて、「現実に存在する形で、その文学性を読み取ろうとする」（同右）方向に移って来ており、その中で延慶本を始めとする諸本の中から、古態と思われる要素を比較検討、吟味していく、という方法に変わってきているように思われる。島津氏は今日的な研究動向も踏まえつつ、「諸本も、さまざまな形で、相互に複雑な影響を重ねて成立していて、それぞれの現存本の書写の段階、成立の段階などを慎重に考慮に置いた上で、動かぬ事実と諸氏の推定の部分を分けて吟味し、細かく古態を追及してゆくことによって、『原「平家物語」』の作者の意図を探って見ることがやはり重要な課題である」（同右）とする立場から、『平家物語』の原態に迫るのである。その方法は、「諸本によって大きく動いている部分と、ほとんど動いていない部分のあること」（本書三十頁）を踏まえ、動いている部分（「祇王説話」等）だけではなく、「『原（「平家物語」）』の時点からほとんど根本的には動いていないと思われる」（同右）題材・詞章（「教訓状」「烽火の沙汰」等）をも考察の対象として重視するというものである。氏の論考の中で、意見の分かれるのは長門本の位置付けであろうが、ここでは個々の結論の詳細は省略する。

長門本との対比（本書十四他）、『新猿楽記』受容の問題（同十三）、そして世阿弥作能の典拠（同十五）等を考察する際に提起される『源平盛衰記』に関わる問題も重要である。『源平盛衰記』研究は、二種の校注本の刊行、黒田彰氏の一連の考察、岡田三津子氏による成簀堂文庫本の報告などにより、その成立や影響力の大きさについて、更に議論が深められてきている。私も以前、大阪青山短期大学所蔵『咸陽宮』絵巻が、冒頭、『古文真宝』後集に収められる名文「過秦論」によって大国秦の歴史を叙述した後、数ある『平家物語』諸本の中で、『源平盛衰記』所収の記述を利用していることを指摘したことがあった。絵巻成立時点、『源平盛衰記』は唐土の詩文とも並び得る歴史叙述として認識されていたのである。そうした視点に注目すると、前掲の世阿弥作能との関係は大変重要なものとなるのである。

その他、小城本『平家物語』の解題（同十二）及び、筑紫路に伝わる平家伝説に関する考察（同十一）は発表時から注目されていたものである。

本書「あとがき」で、氏は「本書は、和歌・連歌を専攻する私の

『平家物語』についての、まさしく試論である。」と謙遜される。しかし、『平家物語』に対峙しても島津氏の姿勢は冷徹である。その中で、問題意識がなおざりにされないことが本書の題目に「試論」と付される所以であろう。巻末には丁寧な索引が付されている。（平成九年七月刊　汲古書院　三一二頁　定価八、五〇〇円）

――立命館大学助教授――